

●はじめに

筆者は昨年2023年9月から一般社団法人大学行政管理学会(以下、JUAM)の会長を務めている。このたびはJUAMについて寄稿する機会を頂いたことに感謝申し上げます。

JUAMは1997年1月に設立され、大学職員を中心に1200人弱の会員を要する団体である。法人の目的は「大学の行政管理について実践的、理論的に研究し、大学行政管理にたずさわる人材の育成をおして、大学の発展に寄与すること」である。

さて、筆者は4、5年前に「未来の当事者である若手教職員を意思決定に参加させよう」というタイトルで本紙に寄稿させていただいたことがある。中央教育審議会が2018年に取りまとめた「2040年に向けた高

等教育のグランドデザイン」の委員の年齢構成に触れつつ、「将来に向けた意思決定においては、年功序列を排し「未来の当事者」の意見を取り入れる」との考えを述べたものである。そこで、今回はJUAMの活動の特色や価値を紹介させていただくとともに、2040年のJUAMに向けて筆者自身が大切だと考えることを、あくまでも私見として述べることにしたい。

●ハードルの低いアウトプットの場

JUAMには、テーマ別の研究会や、学会の運営を担う委員会が多数あり、それらは熱心な会員の献身的な活動により支えられている。また、学会誌を年一回発行し、高等教育機関の運営を実務的視点から研究し、発展させることに

に取り組んでいる。そのような活動から多くの大学職員が持つJUAMの印象は「意識の高い職員の集まり」「大変そう」など、若干ハードルが高く感じるようだ。しかし実際はそのようなこともなく、筆者自身も年一回開催される学会の研究会に懇親会目当てで参加する程度であったが、その研究会で会



杉原明 (職員研修)

●実践的な研究を行う場

JUAMは「学会」である。毎年学会誌を発行しており、論文等の掲載にあたっては査読も行われている。一方、「職能団体」として、大学職員

員の発表を聞くのは楽しく、良い意味でも自由でハードルの低い発表の場であると感じた。そこで、入会から数年後に所属大学内の純粋な仕事ではないけれど興味のあることを発表するなどの、ある種の息抜きとしてこの場を利用するようになっていた。

重要なかという論争が起きることがあるが、結局のところ「どちらも重要」という答えに行きつ

重要なのかという論争が起きることがあるが、結局のところ「どちらも重要」という答えに行きつ

「未来の当事者」積極的に参加 2040年の大学行政管理学会に向けて

●年齢構成の問題

さて、ここからが本題である。JUAMの会員の年齢層は、課長以上の管理職が過半数を占めることもあり50歳代以上の

は「論文」「研究ノート」「事例報告」などの掲載区分があるが、本学会においては「論文」の価値が高く「事例報告」の価値が低いなどということはなく、極めて

私自身は、その議論についてはややそれほど意味のあることとは考えていない。大学においても、研究機関が教育機

関か、あるいはどちらが会員を擁し、またその多

●上の世代に意見が言える組織に

ただ、そのようなルールだけでは、20歳代の若手会員から50歳代60歳代のトップマネジメント層

の現役職員、設立当初に尽力され今なお名誉会員の

進歩を例にあげるまで

進歩を例にあげるまで

●未来の当事者」の意思決定参加

また、会員の学歴という視点においては、大学院修士課程修了者の比率は若い世代のほうが高く

院修士課程修了者の比率は若い世代のほうが高く

院修士課程修了者の比率は若い世代のほうが高く

院修士課程修了者の比率は若い世代のほうが高く

大学行政管理学会
会長(工学院大学) 杉原明